

# 漢詩神奈川

第 26 号

神奈川漢詩連盟  
事務局

神奈川県海老名市  
浜田町16-9

TEL-FAX  
046-233-7641

発行人 三村公二  
編集人 高津有二

## 金河様式を着実に受け継いでいく

神奈川県漢詩連盟会長 三村公二

平成から令和へと元号が変わり、新しい時代の息吹が聞こえてくる毎日であるが、神漢連でも時代の流れを感じさせるように金河様式に変化がみられるようになってきた。

その最たる出来事は、「鑑賞会A」で玉井幸久先生が六年間続いた講義を終えられ、最終講義と感謝の会が十一月二十八日(木)に行われたことである。何時までも講義を続けていたいただきたいというのが出席者一同の偽らざる気持ちであったが、ご高齢である事を考えるとこれ以上のご無理はお願いできないと素直に長年にわたり有難うございましたと申し上げた。評判の良かったこの鑑賞会を終わらせるわけにはいかないと後任を桜庭慎吾先生にお願いして、「鑑賞会A『宋詩鑑賞』とい

う形で引き継いでいただくことになった。

形は違うがこれと同じような事が「鑑賞会C」でも起こっている。前半の上平声の詩の講義が終わり「だれでもわかる七言絶句ここから一步・注釈(上)」が昨年六月に無事発刊されたが、下平声の詩の講義があと一年弱で終わることになっている。当初講師をお願いしたベテランの先生方はこの会の生みの親の城田六郎先生を除いて全員が引退・交代され、代わってこれまで調査・パソコン入力等裏方で会を支えてきた若手が実力をつけ、既に講師として表舞台で活躍していただいている。ネット検索という新しいツールが実力アップの最大の要因だと思いが、後継者が着実に育ってきているのは誠に喜ばしい。

一方、「鑑賞会B」「霧笛(無敵)女子会」の講師の住田笛雄先生、古田光子先生と各サークルの講師役は金星会の飯沼一之先生を始めとして引き続き竹林舎の先生方をお願いした

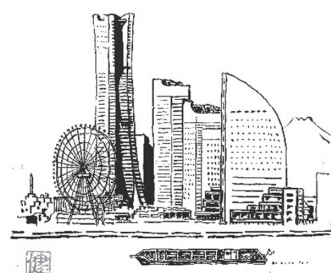
いと思っている。しかし、後継の若手講師の育成が必要だという判断の下に、新しい試みとして「中級者教育」を後藤淳一先生にお願いして二回に分けて行った。講義を受けた皆さん方が一様に非常に勉強になったと言っておられるので、今後、その効果・成長に期待したい。神漢連活動の柱である「初心者入門講座」はこれからも毎年実施していくので(昨年は十三期生「令和会」が発足したが)、講師役はますます重要になってくる。中級者教育は会員の詩力アップをサポートするという観点からも着目していきたい。

秋の講演会では横浜国大准教授の高芝麻子先生に講演をお願いしたが、現役若手の先生のお話は新鮮で多数参加された会員以外の方にも大好評であった。五月の市川桃子先生の講演と併せて、今後も広く会員以外の方にも声をかけていきたい。又、昨年の吟行会には初めて参加したという会員が多かったが、石川先生に〇をもらって嬉しかったと感想を漏らされていた方がいたように、会員の皆様方が「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を実践していく場を提供していくことこそが石川先生におほめ頂いた金河様式の継承と一層の強化になると信じている。



三村公二会長

願いして、「鑑賞会A『宋詩鑑賞』とい



# 連盟の行事

## 研修会

### ―初心者も上級者も活発に討議―

第一回目は十月二十三日、第二回目は十一月七日に神奈川近代文学館中会議室で行われ、各々十二首、十一首の応募がありました。

提出詩には、起承転結にも問題なく優れたものが多くありました。会は例年のごとく選句方式で行われ順位付けが行われました。以下に、第一回と第二回の最高得点の方の詩を紹介します。(川上修己)



研修会での活発な討議

歳末  
巷間車馬太匆匆  
颯颯寒風報歳終  
天正欲明新曆啓  
抱懷宿望舊阿蒙

干支会 五嶋美代子  
巷間の車馬太匆匆  
颯々たる寒風歳終を報ず  
天正に明けんと欲し新曆啓くも  
宿望を抱懷して旧阿蒙

歳末。車の量が増え、運転は乱暴になる歳末。買い物客でごった返す街に冷たい風が吹き、人々は襟をたてて、舞い上がった砂ほこりにまばたきする歳末。ああ、今年も暮れる、新しい年が始まる、すべてが新しくなるという時にふと我が身を振り返る。するとそこにはずつと変わらない、親鳥が卵を温めるが如く宿望を抱いたままの自分がある。

「なんだ、昔のままだ。」

そんな気持ちをしてこの詩を作りました。

#### 飛蚊症

八起会 芝 公男

無聲蚊子絡吾瞳 無声の蚊 吾が瞳に絡む  
隨向飄移視野中 向くに随い視野の中を飄移す  
以手頻追不能捕 手を以て頻りと追うも捕る能わず  
醫言衰相是非蟲 医言う 衰相なりて是は虫に非ずと

私にとって漢詩は他に嗜んでいる短歌や俳句と同様に創作活動の一つで、日常の事物や日々の感動を詠むようにしています。今回の詩は井波律子の中国名詩集に張籍の「患眼」、梅堯臣の「目昏」、范成大の「耳鳴戲題」など、身体を詠んだ詩があり、自分も嘗て経験した飛蚊症を詠んで見ようと挑戦しました。結句は范成大の耳鳴りの詩より「人言衰相現」をかり、起句、承句は中国語の辞典の飛蚊症の項の説明を参考にして作りしました。

## 第十三期令和会の発足

初心者入門講座を終えて、恐れ多くも新元号をお借りしてわが会を「令和会」と称し発足しました。入門講座参加者二十四名へ文書を送付、往復はがきで入会の意思確認。入会者は男性十一名・女性四名計十五名、うち県外者三名。ほとんどが高齢者ですが、令和の新時代に新たに漢詩に挑戦しようという志を持った仲間達です。仏教・詩吟・書道・篆刻・琴・音楽・文学等の多趣味の方々。

講師は神漢連副会長長水城先生・監事松井先生のお二人にご指導戴くことになりました。勉強会は奇数月の第一火曜日、第一回九月三日、第二回十一月五日実施。初会は私を含めて四字目の孤平等形式不備が多くご指摘を受け、二回目もまだ平仄の誤り、詩語の解釈相違、辞書をひくこと、起承転結の構成等ご指導戴きました。神漢連のモットー「令和会の会則第二条にもある「漢詩で学び、漢詩で遊ぶ」。まだ遊べる段階ではありませんが、ストレスのない楽しい会を目指したい。諸先輩の皆さんよろしくお願いたします。

(竹村文孝)



令和会員と講師の方々



# 大磯「鳴立庵」吟行会

## ―石川先生の講評に感激!―

快晴の十一月六日、四十三名が参加し、令和初回(通算十四回)の吟行会が大磯で開催された。順路は大磯駅前に集合し、島崎藤村終焉の邸を見学、秋深まる鳴立庵で西行法師ほかの史碑を見て、湯川施設長の説明を聞きながら、変化に富む園庭や円位堂、虎御前の堂などをじっくりと味わうことができた。後、大磯が湘南発祥地であることを顕彰する碑、新島襄記念碑を經由して会場の大内館へ到着。海鮮の味を楽しんだのち、恒例の柏梁体披露となり、石川忠久先生から全句へ軽妙かつ至言をコメントいただき、一同楽しくも、また感激した吟行となった。(新井治仁)



石川先生を囲んでの記念写真

### 神漢連 第十四回吟行会 柏梁体

◎優秀賞 ◎優良賞

(陽韻)

◎白雲蒼海木葉黃

長岡巨知

◎磯風秋深碧蒼蒼

鈴木正敏

◎鶺鴒秋杪海邊莊

柴本信子

◎文豪舊廬弄秋光

高津有二

◎草堂茅屋弄晴光

住田籠軒

◎松籟閑庭陰士堂

武田一郎

◎樹陰寂寂圓位堂

古田光子

◎秋晴伴友步廻廊

五嶋美代子

◎菊花泉路晚節香

福田忠夫

◎古堂不朽幾星霜

高橋光代

◎遙海磯秋初吟行

下村佐智子

◎暗渠溪水出草堂

浜辺又八

◎對西行像坐胡牀

(無記名)

◎鳴立江畔放夕陽

中野三琴

◎鳴立歌碑弄秋光

香取和之

◎丹柿梢頭雁數行

上田尤子

◎青鳩統鶴向西行

新井治仁

◎富嶽俯臨太平洋

中島龍一

◎武人遁世遊無常

安田 茂

(庚韻)

◎詩朋相会共吟航

高田宗治

◎名勝尋歷杖履輕

横溝喜久男

◎遺跡西行爽氣生

石川喜三郎

◎石佛五智草庵盟

内山義浩

◎佳句箱入墨痕清

川久保普美子

◎中山日暮尚弧征

谷川勝利

### 石川先生のご講評



鳴立庵で熱心に説明を聴く

◎鷗鷺鳴立渚風清

(無記名)

◎鳴立溪流今尚清

櫻庭在州

◎京洛遙遠鳴旅程

鈴木栄次

◎庵庭成吟自欣聲

飯島敏雄

◎忽有吟行談笑聲

城田六郎

◎樹陰深處聽泉聲

高橋純子

◎鶺鴒葦汀秋水明

水城まゆみ

◎相海任流白帆行

大石加代子

◎西行写得幽玄情

細江利昭

◎不愛銀猫憐鶺鴒

瀧川智志

◎大磯函嶺動吟情

中村 泰

◎深秋瓊筵詩酒盟

川上修己

◎鶺鴒去澤邊寂寥生

大森冽子

(尤韻)

◎祈求息災三稔秋

田村左千子

# 台湾漢詩ツアー —台湾漢詩愛好家たちと交流—

第二回の漢詩ツアーに妻とともに参加でき  
てとても嬉しかった。

漢詩連盟のツアーは人数も十数名と顔と名  
前の一致する旅で、終わってみると皆さんと  
親しくなることが出来、とても実りが多いの  
が素晴らしい。

九詩期会主催の江南の旅に夫婦で参加した  
時も、楽しく思い出に残るものであった。

九月八日(日)

昼に成田を飛び立ち一路台湾南部の高雄へ。  
台湾は夜市(余市)が有名だが初日の高雄  
の六合夜市では日本に無いソウルフードや  
珍しい果物等  
が並び、釈迦頭  
や蓮霧などと  
名前も見た目  
も好奇心をそ  
そられ食べて  
みたが美味で  
あった。



高雄夜市フルーツ珍品

九月九日(月)  
台南、台中観光

高雄のシンボルの観光地、蓮池潭地区の龍  
虎塔では、龍の口から入り虎の口から出ると



蓮池潭龍虎塔に全員集合

と同じ大学で教鞭をとら  
れた方である。生憎と  
月曜日が休館日中に入  
ることが出来なかった。  
一路新幹線にて台北へ。



王育徳記念館前

悪行が帳消しに  
なるといういわ  
れがあり楽しく  
潜り抜けた。

台南では王育  
徳記念館も訪ね  
た。王育徳氏は  
全日本漢詩連盟  
の石川忠久会長

九月十日(火)

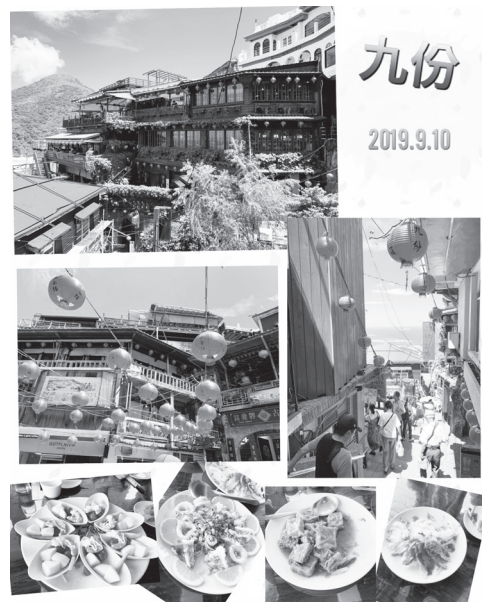
十份でのランタン上げは面白いハプニング  
が待っていた。「早くどいて！列車来る！早  
く早く！」慌てて線路から飛びのくと直ぐに  
列車が近づいて来た。妻の書いた「息子たち  
に良縁を」の願いを込めたランタンがくつき  
りと晴れた青空高く昇っていく。



十份のランタン上げ

九份では郷土料理を味わった。斜面に石段  
や石畳、古い街並みで海を臨み情緒豊かな風  
景が広がる。

九份  
2019.9.10



九份の街並みと郷土料理

夜には今回のツ  
アーのメインであ  
る日本と台湾の漢  
詩人交流会が開催  
された。席上揮毫に  
吟の交歓と盛り沢  
山で、名通訳もあり  
思い出深いものとな  
った。

中でも住田先生  
の自詠自書自吟は  
我々漢詩愛好者、書  
や吟を愛好する者  
にとつての理想だ。

交流会後の晩餐  
会では料理の美味



盛り上がった日台漢詩人交流会



しさもさるこ  
とながら「かん  
ぺい、かんぺ  
い」のやり取り  
に笑顔の花が  
咲いた。言葉の  
壁はあれど趣  
味を同じくす  
る者同士、打ち  
解けあい楽し  
いひとときで  
あった。

賀日臺交流

萬里飛來喜彩霞  
水明山紫似吾家  
詩朋結侶會臺北  
同字文華興不涯

九月十一日(水)  
故宮博物院  
には以前から  
興味があり、一  
度は行ってみ  
たいと思っ  
ていた所だ。素晴  
らしい名品揃  
いで、玉の白菜  
や象牙の彫刻  
の前では皆、感



住田さんの自詠自書自吟

住田笛雄

万里 飛來 彩霞を喜び  
水明 山紫 吾家に似たり  
詩朋 侶を結び台北に会す  
同字の文華 興 涯せず



故宮博物院前に勢ぞろい



故宮博物院の名品に感嘆しきり

嘆しきりであった。所蔵品の数が多くとても  
一回では見ることが出来ないのでもた機会  
があれば訪れてゆっくり見て回りたいもの  
だ。工芸品ばかりでなく、青銅器、陶磁器な

とで割引の恩恵に預かった人もいたようだ。  
まだまだ旅の思い出を挙げればキリがない  
が、台湾の魅力が垣間見ることができた楽しい  
旅となった。  
(長岡巨知)

忠烈祠儀兵交代式



ど中国六千年の  
精華が集められ  
ているのだから。  
忠烈祠の儀兵  
交代式も、その  
キビキビした動  
きを興味深く見  
学した。

昼食は有名な  
鼎泰豊での小籠  
包を。予約して



台湾料理に毎食舌つづみ

# 「漢詩の四季、日本の四季」 ホトトギスは春の終りを告げ、 蟬は哀しく秋に鳴く

## —高芝麻子先生講演会—

令和元年十一月十三日(水)神奈川近代文学館に於いて、横浜国立大学教育学部准教授の高芝麻子先生による表題の講演会が開催され、百二十名を越す来場者で盛会であった。

巧みなプロジェクター操作と説得力のある解説は、日本の季節感と漢詩の季節感の違いについて、ホトトギスや蟬などを例にして日本の和歌や中国の古典を引用して考えさせられる有意義で楽しい二時間であった。以下先生の講義の内容をお伝えします。  
一、四季の分類の意識

日本では「古今和歌集」や「新古今和歌集」など、四季で分類されるが、中国では「文選」や「唐詩選」などでは四季による分類は無い。二、四季の特徴

中国では春秋は変化の季節と捉えられ、変化に触発されて感情が動き悲しみを発して詩が生まれる。孟浩然「春曉」、杜牧「清明」、



高芝麻子先生

李白「子夜呉歌」、韋応物「秋夜呉丘二十二員外」の四首を説明して、季節

の変化によって感情が引き立てられる詩となっていること。夏冬は停滞の季節と捉えられ変化が少なく詩には向かない季節と認識される。冬には「雪」や「年の瀬」という変化もあり、唐代中期以降は冬の詩も増える。高駢「山亭夏日」、杜荀鶴「夏日題悟空上人院」、柳宗元「江雪」、高適「除夜作」の四首を説明して季節内の変化がないので一瞬を捉える詩となっていること、などを解説した。

三、中国と日本の春と秋の詩や歌から漢詩の季節感をホトトギス・蟬の例から考察する。

### \*ホトトギスの例

#### 送春婦(抜粹)

唐・白居易

三月尽日日暮時 三月尽日日暮の時

去年杏園花飛御溝緑 去年杏園花飛びて御溝緑なり

何処送春曲江曲 何処にか春を送らん曲江の曲

今年杜鵑花落子規啼 今年杜鵑花落ち子規啼く

送春何処西江西 春を送るは何処ならん西江の西

帝城送春猶怏怏 帝城に春を送るも猶ほ怏々たるに

天涯送春能不加惆悵 天涯に春を送れば  
能く惆悵を加へざらん

### 『古今和歌集』卷十一

ほととぎす 鳴くや五月のあやめぐさ

あやめも知らぬ恋もするかな

このように漢詩では春の末に鳴く鳥とさ  
れ、和歌では夏に鳴く鳥として扱われる。

### \*蟬の例

#### 早蟬

唐・白居易

六月初七日 江頭蟬始鳴

石楠深葉裏 薄暮兩三声

一催衰鬢色 再動故園情  
西風殊未起 秋思先秋生  
憶昔在東掖 宮槐花下聽  
今朝無限思 雲樹繞湓城

六月初七日江頭に蟬始めて鳴く

石楠深葉の裏 薄暮兩三声

一ひ催す衰鬢の色 再び動かす故園の情

西風殊は未だ起たざるに 秋思 秋に先んじて生ず

憶ふ昔東掖に在りて 宮槐花下に聴くを

今朝無限の思ひ 雲樹 湓城に繞る

『古今和歌集』卷十四「恋歌」 紀友則

蟬の声 聞けばかなしな 夏衣

薄くや人のならむと思へば

閑さや 岩にしみ入る 蟬の声 松尾芭蕉

このように漢詩では蟬は秋に鳴くとして扱  
い日本では夏に鳴くとして扱われている。

### 四、まとめ

(1) 季節の情緒や風物詩は、気象や動植物の  
生態だけでなくその国の文化のありか  
たをも反映している

(2) 日本文化は中国文化の影響を強く受けて  
いるが、すべての季節を詩歌で描きたい  
という意識は日本独自のものではないか

(3) 日本漢詩は季節ごとの情緒という意味  
においては中国漢詩を踏襲している面  
も大きいですが、風物詩は多くが日本流に  
なっている

(4) ただし季節感や情緒は日中ともに時代  
によっていくらか変化がある

(水城まゆみ)



## 漢詩鑑賞会A

―玉井先生から桜庭先生へ―

漢詩鑑賞会Aは、この度、玉井先生の「唐詩鑑賞」が終了し、引き続き、桜庭先生の「宋詩鑑賞」が始まります。

玉井幸久先生の「唐詩鑑賞」は、二〇一四年一月、地球市民プラザにて第一回定例会が開催されました。講義は、「漢詩愛好家なら誰でも楽しめる唐詩鑑賞」を目標とし、唐代詩人が時代背景の中でどのように生き、どのように詠ったのか、漢詩を通して彼らの喜怒哀楽に触れ、その足跡をたどる旅でした。

唐代の代表詩人、孟浩然、李白、杜甫、白居易、王維、杜牧についての六年間六〇回の講義には、毎回三〇〜四〇名が出席し、先生の熱弁に聞き入りましたが、皆に惜しまれつつ昨年十一月二十八日の最終講義「白居易の詩と生き様」(約八〇名出席)をもって終了しました。



玉井先生の最終講義



玉井先生への花束贈呈

最終講義後の「感謝の集い」で三村会長から玉井先生に感謝状を差し上げました。

燧翁玉井幸久先生

燧翁先生歳九十四 四國愛媛人

唐朝高韻都窮盡 熱血辯才千萬言

六歳累回成講義 九旬餘四企鴻軒

騷人眞意融融說 處士交情懇懇論

訓誥諄諄風雅會 銘心鷗鷺報師恩

茲神漢連詩友一同深謝燧翁先生

長記先生功勞事

令和元年十一月二十八日

神奈川漢詩連盟 会長 三村公二 印

引き続き、年明け一月二十三日からは、桜庭慎吾先生の「宋詩鑑賞」が開講となります。開講に当たって、先生から頂戴した一文の一部(誌面の都合で)を掲載します。

『詩経』以来、時代の趨勢に抵抗するところに、詩の生命があると考えてきた中国の詩の伝統のなかで、宋代の詩人達は何を考えて詩を作ってきたのか。そして詩人たちの美意識は如何なるものであったのか。さまざまの切り口により宋代の詩を読み、詩人達の心の壁に接近したい。採り上げる詩人は、北宋では蘇軾を中心とした詩人群を、南宋では陆游、楊萬里、范成大等を予定している。

例会の日時、場所は、これまで同様、毎月木曜日、地球市民プラザです。常時入会できます。ご興味のある方のご出席をお待ちしています。

(瀧川智志)

## 漢詩鑑賞会C 講師交代

―桜庭・住田三上先生有難うございました―

鑑賞会Cは「七言絶句(ここから一步)」(佩文齋詠物詩選抄)に基づき、神奈川近代文学館にて、毎月十二首の七言絶句を講師の解説により白文から読み解き鑑賞する勉強会です。上平声韻に引き続き、二〇一七年十一月からは下平声韻の七言絶句三五〇首について、城田六郎、桜庭慎吾、住田笛雄及び三上光敏の四人の先生方が講師として指導に当たられました。各先生のご尽力により、多くの事を私共は学ばせて頂き深く感謝申し上げます。従来、漢詩は読下し・訳・鑑賞の要点付きで読むのがあたりまえのように慣れていた私共にとつて、その講義は新鮮なものでした。講義で学ばせて頂いたことの要点は、

- ① 漢文法を基礎としての白文の読下し方法。
- ② あたりまえの事ですが、常に辞書で「字」「語」の意味を確認することの大切さ。
- ③ 詩の大意をつかみ、分らない点を自分の頭で考える大切さと面白さ。
- ④ 唐から明代までの多くの詩人の略歴。
- ⑤ 中国の多くの文物・詩跡・典故など。

諸般の事情により、昨年七月から講師陣は新たに城田六郎先生、中島龍一・新井治仁・香取和之の諸氏四名に変更になりました。皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

(香取和之)

**例会偶数月サークルの交流会開催**

—漢詩作りの取り組み方について意見交換—

十一月二十日、かながわ労働プラザ会議室で、例会を偶数月に実施しているサークル会員を中心に二十二名が参加して交流会が開催された。

最初に、竹林舎友・城田六郎先生から、「起承転結の転句の重要性」と題して、唐詩の中から転句の展開が異なる四つのパターンの漢詩について、夫々の特徴点のお話を頂いた。次に、本年度の全国漢詩大会特別賞受賞の川上修己さんが、ご自身の漢詩作りの取り組み方を話された。

その後、参加者が漢詩作りの詩題の決め方や起承転結の組み立て方の苦労話を披露する中で、漢詩作りは「いつ、どこで」という話題になり、「夜、寝る前に布団の中で」が圧倒的に多かったのには参加者一同ビックリ。懇親会は、同プラザ九階レストランに場所を移して実施された。初対面の人も多かったが、すぐに和気藹々。時間の経過も忘れるほどに盛り上がった。(高津有二)



サークル交流会参加の皆さん

**漢詩中級講座開かる**

漢詩の作法を身につけ、力の向上を目指して、県連の中級者講座を催しました。十月六日と二十七日の二回にわたり新宿で、後藤淳一先生を招いて九名の生徒(希望者)が受講しました。

講義内容は、漢詩は古代中国語の詩であること、書き下し文の書き方、旧字と正字・異体字、筆記体と活字体の区別、パソコンでの「搜韻」の活用による詩語の検索、用例の調査法などでした。これらはたいへん有意義な内容で、生徒一同新たな気持ちを持つことができました。

また添削の仕方について各生徒の実作で指導があり、課題詩についての添削を通じて、気を付けるべきことを指導された。特に強調されたことは、起承転結の構成が最も重要であること、これがまずいと読み手に感動を与えることが出来ない、ということでした。また、平仄の誤りについては、語の意味により違いがあるので、中級者になればとくに気を配り、詩語表にも誤りがあるのので気を付けねばならないなども指摘されました。(中島龍一)



合同勉強会後の懇親会

**パソコン・スマホでらくらく漢詩作り  
神辞会開発ツールの説明会始まる**

いざ漢詩を作ろうとすると、詩語集で適当な詩語を探し平仄を辞書で調べて、規則通りに配置する、という一連の作業は結構大変だと感じる方も多いのではないのでしょうか。

そのため、本当は漢詩を作ってはみたいものの漢詩鑑賞だけにしていての方、漢詩作りに大変な労力と時間を要してちよっと疲れてしまおうという方もいらっしゃるかと思います。

そんなお悩みを少しでも解決しようと、神漢連神辞会では、作詩支援ツールとして、電子詩語集と七絶推敲表を開発しております。

昨年十二月から、普及促進のため会員向け説明会を始めましたので、興味のある方は神漢連HP「連盟からのお知らせ」欄から、日程等確認の上、ご参加ください。(牛山知彦)

**「だれでもわかる 七言絶句ここから一步(上)  
佩文齋詠物詩選七絶抄・注釈」刊行**

会報二十四号でその内容をお知らせしていますが、現在好評頒布中です。是非ご購入下さい。

頒布価格(実費)1500円。送料別。

申込先: 〒247-0063 鎌倉市梶原

二二六〇一―三一九 香取和之

TEL 0467-48-5446

E-mail: katorikazuyuki@gmail.com



# 会員の活動

## 詩游会「田原健一先生追悼詩集」発行

詩游会 浜辺又八

田原健一先生が亡くなられて、早や三年になろうとしています。詩游会は平成二十二年度の漢詩連盟「漢詩入門講座」以来ご指導を賜わってきました。

会員には田原先生に対する並々ならぬ感謝の思いがあり、先生の三回忌に合わせて大磯の我が又八工房に集まり、検討を重ねました。原稿集約後、数日間は、いわばアナログの手作りで印刷、製本し、令和元年六月一六日付けで追悼詩集を刊行し、ご遺族にお届けする事が出来ました。

広く漢詩に親しんでもらう為にと神漢連のホームページに描き続けられた中国名詩に対する田原先生の挿絵、先生が残された玉韻、詩游会会員の追悼詩と想い等、常に我々のそばにおられた先生との思い出が詰まった記録にできたのではないかと思います。また、企画編集の板本健一氏、監修の住田笛雄先生に改めて感謝です。

感銘を受け且つ親しみを覚えた詩を一つ  
(昨年十月福島水害の報を聞きつつ)。

福島桃

福島の桃

安達太良山麓傍 安達太良山麓の傍ら

炎天村媪路頭商 炎天村媪路頭の商い  
玉盈盥裏伏流水 玉は盥裏に盈ち伏流の水  
購得肥甘一嚙涼 購い得たり肥甘一嚙の涼

## 平成最期の思い出

好文会 室橋幸子

平成最後の春二月、一本の電話が入りました。昔、小学六年生だった詩吟の生徒尚見さんです。三年詩吟を習いコンクールも入賞し、期待大だった時、突然歌手になりたいと教室を去りました。それでもマイクの使い方をほめられたとか、お礼を云われたりしました。その後尚見さんはソウルミュージックに進み勉強し、CDを出したりしていましたが結婚、今は二児の母。その尚見さんが電話で私の人生は詩吟が原点です。詩吟のお陰で今があります。今後は二人の子供に是非詩吟を教えてくださいと私を尋ねて来たのです。まさかと驚きました。三十数年前の私の教室は若いママ達の子連れで詩吟に来ていました。私は幼児にいきなり難しい漢詩は馴じみ難いと思ひ、会詩とどらえもんを作詩しました。

今、生徒達は成人し、財団の漢詩集を吟じ、全国大会やレコード会社のコンクールで活躍するも、今は幼児がいなく吟じなかつたのですが、尚見さんのお蔭で又六歳と三歳の子にどらえもんを教えています。三十年前の事を忘れず詩吟が人生の原点などと云って

貰えるなんて、長い間詩吟を教えさせて頂く冥利に尽きる思いです。

## 神漢連との交流

陳興

私は一九八〇年生まれの人で、福建省出身です。二〇〇〇年に留学生として来日し、二〇一〇年の三〇歳を機に帰国しました。

神漢連との縁を結んだのは二〇一八年の中秋の直前で、言葉の壁を乗り越えて、西安詩詞学会と神漢連との西安での交流会が成功していたことを今でも心から感銘しています。

その後八カ月が過ぎ、突然横浜への出張が決まったところ、交流会で詩友となった神漢連の皆様が歓迎会を開いてくれました。

重遊横濱

重ねて横浜に遊ぶ

風吹絲雨趁雲灰 風吹き絲雨雲の灰を趁ひ  
煉瓦紅房近海隈 煉瓦の紅房は近海の隈

再到横濱舊遊地 再び到る横濱旧遊の地

群鷗不識我重來 群鷗は識らず我が重ねて来たるを

住田先生のご好意で、神漢連に入会することができました。自分もこれから中日の漢詩交流を深めるように努めたいと決意しました。

詩とは、人生を語るものであり、旅の音を留めるものでもあり、各種の感情を後に残しておくものでもあります。大連にて。

注：陳氏は平成三十年の神漢連・西安漢詩ツアーでの日中交流会に参加され、この度会員の仲間入りです。

# 小特集 —漢詩の為の漢文法と 助字の使い方—

## 特集のねらい

漢詩を作る時、漢語辞書と共に「だれにもできる漢詩の作り方」や「詩語辞典」などの詩語表を用い、さらに中級者になると各種「韻府」を用いると思われる。しかし漢文法の基礎がないと、不適切な表現・語順の句を作ることになりかねない。また、詩で作者の気持ちを的確に述べるには、「助字」の活用が必須となるが、どのように学び、またどの図書を辞書の如く引きながら作詩すれば良いのか困っている方は多いと思われる。本特集がこれらの事への一助となれば幸いである。

(香取和之)

## 漢文法入門書「新明説漢文」で漢文法をチエックしよう

竹林舎友 桜庭慎吾

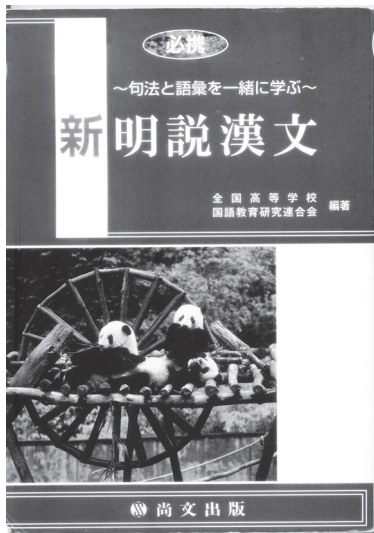
本書は高等学校の漢文の副読本である。県連の初心者入門講座の受講生に対して、四、五年前よりお薦めしている本で、痒い所に手が届くように漢文法を解説している。高校時代に漢文を習った人でも、漢文や漢詩に出

合ってどの様に読んだらよいか、とまどいを感じた人も多いと思う。自分の漢文法の知識をチエックする気持ちで本書を繙いていただきたい。

本書の構成は、第一章の基礎編、第二章の句法編、第三章の用字編を主体としている。まず基礎編では、漢文は外国語であり、文法は日本語と全く異なっていることを押えて欲しい。(この点、漢字を用いている日本人は錯覚を起し易い。)この基礎編が漢文法の殆ど全てと言えるほど重要な箇所、繰返し精読していただきたい。漢文の構造は極めて論理的であることから、やや数学に似ている所がある。基礎編でしっかり土台を固めて次のステップに進んで欲しい。

次の句法編は、句や文章(詩も含めて)を読んだり、作ることを学ぶ。すなわち否定形、疑問形、反語形など十四の類形についてその読み方や作り方を詳しく説明している。

第三章の用字編は、基本重要語として以、已、可、能、与、欲、など十四字をあげ、その



意味と句や文のなかでの使われ方について懇切に解説すると共に、その他多くの用字、すなわち再読文字、副詞、接続詞、動詞、名詞など、一括して「助字」と呼ばれる計百十四字について説明している。この助字については、次稿で城田先生が詳しく説明されている。

以上、本書の概略を記したが、この三章のなかの各説ごとに練習問題がある。自分の理解度を確かめる為にもこの課題に是非とも挑戦していただきたい。

## 助字の使い方について

竹林舎友 城田六郎

まず助字とは何かを説明します。漢文で主として名詞・動詞・形容詞などの実質的な意味を表わす語を実字という。これに対して前置詞(于於)・後置詞(之者)・助動詞(令使)・接続詞(而則)・終尾詞(也焉)など実字を助けてある種の意味を添える語を助字という。実字に対して虚字ともいう。

助字は約二百あるといわれるが、一つ例をあげて説明する。「何」という字はいろいろな読み方があり、意味もそれぞれ異なる(同音異訓)ので代表として例にあげる。( )内は読み方を表し、その下は意味を表す。

(1) 何(なんの)どんな、(我何面目見え—私はどんな顔をして、彼等にあつたらいいのか、合せる顔もない)

(2) 何(なんぞ)どうして、(帝力何有於我



哉——天子の力などどうして私に関係があるうか、関係はないのだ。」

(3) 何(なにか、なにをか)なにか、なにを、(苟正其身矣、於從政乎何有——もし自身自身を正しくするなら、政治に従事するにあたって、何の困難があるうか。)

(内省不疚、夫何憂何懼——心に反省してみて、やましいことがなければ、いったい何を恐れることがあるうか、何も心配し恐れることはないのだ。)

(4) 何(いづれ)どの、いつ(天下何地無月——この世でどの土地で月が見えないのだから、どこでも見えるのだ。)

(5) 何(いづく)どこ(県官急索租、租税從何出——県の役人が厳しく租税を要求するが、租税などどこからだせるのか)

日本語では同じ発音でも、漢語では意味が微妙に異なる言葉(同訓異字)の例として「また」を例にとってみよう。

(1) 復(また) 反復連続を表す。(莫怪山前深復浅——山の前の河は深かったり、浅かったりするのを怪しむことはない。)

(2) 還(また) たちかえつての義があり、かえつても読む。(春来還發旧時花——春になればまた昔のままの花を咲かせている。)

(3) 又(また) またもや、その上にの義で添加を表す。(霜鬢明朝又一年——明日の朝になれば、白髪のふえた鬢はまた一つ年をとっているのだ。)

助字の使用にあたっては、辞書でその意味

を確認することは勿論であるが、用例を調べることが大事である。そのためには次の参考書が適当であろう。

唐詩概説 岩波書店(岩波文庫)

新明説漢文 尚文出版

漢詩漢文小百科 大修館書店

助字小字典 内山書店



### 「助字」の学び方と「唐詩概説—唐詩の助字」の活用について

以文会 香取和之

助字を学ぶことの重要性については、城田先生が前稿で詳しく述べられている。本稿では、どの図書でどのように学び・活用すれば

良いかについて補足する。

助字としてどのような字があり、そしてその字の意味・用例を理解するには、桜庭先生が前稿で述べられている「新明説漢文」が高校の教科書の副読本であり、分りやすく意を尽くして、お薦めである。しかし、その用例は論語・孟子や史記などから採られており、漢詩の用例は極めて少ない。その為、各助字が漢詩でよく用いられるものなのかどうか分からない。また、作詩の時は、「ただ」「まさに」などの表現案が先にあり、その後これらをどういう助字で表現すればいいのかという思考過程になるため、本書では該当する確かな助字を見つけることに難点がある。

この観点からは、城田先生が参考書として挙げておられる「唐詩概説」のなかの附録「唐詩の助字」が優れている。本書では、代表的な助字表現七十三項目が「あいうえお」順に並んでおり、項目毎に該当する複数の助字を挙げ、その平仄・意味とニュアンスの違い、また唐詩での用例を挙げている。七十三項目としては、「いかん」「かえつて」「この」「さもあらばあれ」「ただ」「ついに」「まさに」「やや」等々である。

また手頃な辞書では、「新字源」(角川書店)には「全助字の解説一覧」が巻末にあり、「漢辞海」(三省堂)では、各助字に詳しい説明と豊富な用例があり、優れているようである。我々漢詩の初中級者は、適切な助字を用いて意を尽くした漢詩を作りたいものである。

# 論語とお酒

住田笛雄

戦前の旧制高校の学生が歌ったデカンシヨ節に、「論語子皿子を繙いてみたが、酒を飲むと書いてない。論語孟子を繙いてみても、酒を飲めとも書いてない。」というのがある。

因みに、このデカンシヨは、デカルト・カント・シヨウペンハウエルの略とされているが、江戸時代の里謡に「丹波篠山、山家の猿が、花のお江戸で芝居する、ハアエ、ヤレコリヤ、デツカンシヨイヨ」というのがあって、これをもじって取り込んだものと思われる。

さて、小生浅学にして、孟子は深く読んだ事がないので、酒について書いてあるのかどうか分からないのだが、論語には、二箇所で酒に触れている。

一箇所は、子罕第九に、「子曰く、出でては則ち公卿に事え、入りては則ち父兄に事え、葬事は敢えて勉めずんばならず、酒の困れを為さず。何ぞ我にあらんや。」である。

「朝廷に出ては公卿に事えて誠意をつくし、家庭にあっては父兄に事えて孝友をつくし、父母の喪には悲しみをつくし、禮を尽くすように勉めないことはなく、酒を飲んでも行儀を失って乱れることがない。この四つのことが出来ているかと考えてみるのに、私には、一つも出来ていない。」と自謙遜し



て人々に教えたものである。このような事は当然に出来ているはずの孔子が言う所に、重みがある。酒について裏読みをすれば、孔子様も酒を飲む時には羽目を外すようなことがあったのかもしれない。

もう一箇所は、郷党第十の、孔子の飲食について記した章に出てくる。

「惟だ、酒は量なければ、乱に及ばず。」  
「惟だ、酒は人と楽しみを共にするために飲むのであるから、分量を限ることはしないが、快く酔うのを度として威儀を乱すほどには飲まない。」孔子は、六尺豊かな大男であったというから、酒は飲めば相当に強かったであろう。

誠に立派なみかたで、恐れ入る他はない。先の、子罕第九の言い方は、謙遜に他なるまい。

結論としては、論語を読むと酒を飲むなどは、書いてない、といえようか。むしろ、乱れぬ範囲で(大いに)飲め、と言っていると思う。

これから酒を飲む縁が増える季節には、「百薬の長」を大いに楽しみたい。

樂百薬長

百薬の長を楽しむ

簾軒 住田笛雄作

晩春醞釀酌金觴

晩春の醞釀 金觴に酌み

初夏搾醪嘗碧香

初夏の搾醪 碧香を嘗める

秋釀到來齋爛醉

秋釀到來 爛醉を齋し

冬醇味得樂顛狂

冬醇味わい得て顛狂を楽しむ

春の新酒を金杯に酌み

初夏搾りたて碧香芳し

秋の旨酒酔を楽しむ

冬の無濾過酒狂い楽しむ





# 神漢連会員「全国漢詩大会」で大活躍

通常のPCで対応できない旧漢字は常用漢字を用いている。書き下し文の旧かな、旧字等は大会作品集通りとする。

## 平成令和元年度

## 全日本漢詩大会香川大会



石川先生のご講演

### 高松市長賞

函嶺道中

函嶺道中

川上修己

田城拂曉向雲峰

田城<sup>でんじょう</sup>払曉雲峰に向かう

八里行程七尺筵

八里の行程 七尺の筵

磴道羊腸人馬喘

磴道羊腸 人馬喘ぎ

函山登盡夕陽春

函山登り尽せば夕陽<sup>ゆうやう</sup>春づく

### 「通釈」

小田原の宿を早朝雲のかかった山(箱根の山)に向かう。八里の行程を七尺の筵でエンヤラコと登る。曲がりくねった石だたみの坂道は人も馬も喘ぎ大変だ。この箱根山を登り終わればもう夕方になってしまった。

先般の全国漢詩大会において高松市長賞の荣誉に預かりました。「道・路・径」という詠題での募集でした。模索した結果が受賞詩です。これは昔東海道を江戸から京都に下るときの旅人を想定したものです。今では国道一号线を箱根の先の芦ノ湖まで車で上がるのは容易ですが曲がった坂道は長く、昔日の旅人が石畳みの急坂を登ったことは困難であったことは想像できます。この思いを詩にしてみました。

### 秀作

都邑雪朝

都邑<sup>みやこ</sup>の雪朝<sup>せつちゆう</sup>

香取和之

睡起四望敷白銀

睡起して四望すれば白銀敷く

陽光輝映淨無塵

陽光輝映し浄くして塵無し

高樓櫺比靜閑裏

高樓<sup>たかろう</sup>櫺<sup>しゅう</sup>比<sup>ひ</sup>す 静閑の裏

人迹疎疎轍迹新

人迹<sup>てしせき</sup>疎<sup>そ</sup>々 轍<sup>せき</sup>迹<sup>せき</sup>新<sup>あたら</sup>なり

### 最優秀賞

小嶋明紀子

西湖孤山觀梅

西湖孤山觀梅

湖邊幽歩柳毳毼

湖邊幽歩すれば柳毳<sup>さんきん</sup>毼<sup>えん</sup>たり

閑聽春鶯水似藍

閑かに春鶯を聴けば水藍に似たり

千載風流在何處

千載の風流何處にか在る

梅開隱士一山庵

梅は開く隱士<sup>いんし</sup>の一山庵<sup>いっさんあん</sup>

栄えある賞を頂きました。石川忠久先生、漱石記念漢詩大会の関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。今回、「西湖」「梅」「宋代の詩人、林逋(≡林和靖)に対する敬慕の情」を一首に纏めることにしました。これらの題材を詠んだ昔の作品の数は膨大ですが、『瀛奎律髓』の「梅花類」に掲載されている律詩が特に参考になりました。また、近年の書では『中国名勝詩詞大辞典』も、歴代の作品をコンパクトに紹介して読みやすい書です(説明は現代中国語です)。私が講師役を務めさせて頂いている「漢詩創作研究会」(毎月、横浜で開催)も、皆様のお陰を持ちまして四周年を迎えました。今後も沢山の方のご参加をお待ち申し上げます。

優秀賞

過鎌倉和賀江島

鎌倉和賀江島を過る

上田尤子

他年宋舶往來津

他年宋舶往來の津

磁片猶遺砂礫濱

磁片猶お遺す砂礫の浜

最古灣頭見何物

最古の灣頭に何物かを見る

如今多少弄濤人

如今多少の濤を弄する人

佳作

秋日郊行

秋日郊行

池上一利

落葉成堆霜氣濃

落葉堆を成し霜氣濃やかに

群飛赤卒好風從

群飛の赤卒好風從う

老軀曳杖秋郊下

老軀杖を曳く秋郊の下

歸路蒼茫帶夕春

歸路蒼茫として夕春帯ぶ

訪陽關遺跡

陽關遺跡を訪う

高津有二

平沙萬里遠相尋

平沙万里遠く相尋ぬ

要塞天涯生夕陰

要塞天涯夕陰生ず

摩詰詩篇猶不朽

摩詰の詩篇猶お朽ちず

陽關三疊向風吟

陽關三疊風に向かつて吟ず

堀端保聖

紫陽花

紫陽花

連日梅霖懶出門

連日の梅霖門を出るに懶し

鬱陶永晝坐幽軒

鬱陶たる永晝幽軒に坐す

紫陽花濕小庭景

紫陽花湿ふ小庭の景

白白青青正洗魂

白白青青正に魂を洗ふ

入選

春遊漫步

春遊漫步

室橋幸子

東郊風暖踏青時

東郊風暖かにして青を踏む時

春草池頭歩自遲

春草池頭歩自ら遅し

殷殷鐘聲天欲暮

殷殷たる鐘声天暮れんと欲す

野梅黃鳥促題詩

野梅黃鳥詩を題すを促す

冬夜

冬夜

小林迪雄

降霜一白夜光流

降霜一白夜光流る

零露凝氷樹杪稠

零露凝氷樹杪稠し

窗裏寒燈窗外月

窓裏の寒灯窗外の月

三更孤影促鄉愁

三更孤影郷愁を促す

第十一回諸橋轍次博士記念漢詩大会

新潟県教育委員会教育長

坂上貞夫

謝諸橋博士浩恩

諸橋博士の浩恩に謝す

實直謹嚴博士魂

實直謹嚴なるは博士の魂

人生在勤止軒言

人生勤むるに在り止軒の言

漢和大典無窮業

漢和の大典は無窮の業

編纂功勞謝浩恩

編纂の功勞浩恩に謝す

此度、第十一回諸橋博士記念漢詩大会(三条市庭月)において、拙詠が計らずも身に余る光榮に預り恐縮の次第です。でも嬉しいのは諸橋博士記念館のある当該地とは深い縁あつて時々出入りしてましたので、我が故郷に

帰ったような感慨です。漢詩を詠ずる際、博士の編んだ「大漢和辞典」は必須です。幾分なりとも微衷が通じたものと感じております。表彰式の後、同庭苑で行われた「流觴曲水宴」では柏梁体で、頂いた韻字が「宮」でしたので「曲水流觴漢字宮」と詠じてきました。これからも一層精進を重ねていきたいと思ひます。

優秀賞

首丘

丘に首す

岡田康男

久勞筋骨住塵寰

久しく筋骨を勞して塵寰に住し

今接郷音意自閑

今郷音に接して意自づから閑なり

盪耳枕巖聽澗水

耳を盪ひ岩を枕して澗水を聴き

一觴一詠老家山

一觴一詠して家山に老ゆ

牛山知彦

看櫻

桜を看る

萬朶瓊葩染淺紅

万朶の瓊葩淺紅に染まり

港丘春靜度微風

港丘は春靜かにして微風度る

花陰交酌洗憂患

花陰に交酌し憂患を洗へば

片片繽紛落盞中

片片繽紛盞中に落つ

秀作賞

秋夕郊行

秋夕郊行

大谷明史

一望郊原黃葉輕

郊原一望すれば黄葉輕し

殘花盡處淡煙生

殘花尽くる処淡煙生ず

西山日落風蕭瑟

西山日落ちて風蕭瑟

脚下尖尖促織聲

脚下尖尖たり促織の聲



西安牡丹苑

西安牡丹苑

小嶋明紀子

獨訪西京欲醉春  
風中處處妙香新  
開元國色今猶在  
使客長思楊太眞

獨り西京を訪ねて春に酔はんと欲す  
風中處處妙香新たなり  
開元の國色今猶ほ在り  
客をして長く楊太眞を思はしむ

奨励賞

字眼隱朝市

字眼は朝市に隠る

岡崎勝郎

太息作詩風韻貧  
少閒舍筆可離茵  
時宜秋色佇街巷  
字眼豈圖潛俗塵

太息す詩を作るも風韻の貧しきに  
少閒筆を舍いて茵を離る可し  
時宜秋色街巷に佇めば  
字眼豈に図らん俗塵に潜みたるを

看顏眞卿書有感

顏眞卿の書を見て感有り

三上光敏

眞跡遺芳玄又玄  
造形顔法意悠然  
蠶頭燕尾魯公印  
情感快哉懷古賢

眞跡の遺芳玄又た玄  
造形の顔法意悠然たり  
蠶頭燕尾魯公の印  
情感快哉古賢を懷ふ

消夏清游

消夏の清游

俣野長生

炎天六月泛輕舟  
湍激青溪水上遊  
搖漾追涼風籟爽  
槽聲協奏棹郎謳

炎天六月輕舟を泛かべ  
湍激の青溪水上の遊  
揺漾涼を追へば風籟爽やかなり  
槽聲協奏す棹郎の謳

過舊寺

旧寺に過る

杉森千枝美

枕流院宇夕陽曛  
再讀依稀碑背文  
更問雛僧古人跡  
無言漫指水邊墳

流れに枕む院宇夕陽曛じ  
再読す依稀たる碑背の文  
更に雛僧に古人の跡を問へば  
無言漫に指さす水辺の墳

第二十二回全国ふるさと漢詩コンテスト

最優秀賞

多久聖廟

多久聖廟

小嶋明紀子

韶樂今猶奏廟堂  
一山碧樹自清涼  
淳風千載因賢守  
人謂恰如鄒魯鄉

韶樂今猶ほ廟堂に奏す  
一山の碧樹自ら清涼たり  
淳風千載賢守に因る  
人は謂ふ恰かも鄒魯の郷の如しと

優秀賞

古寺喫茶

古寺喫茶

池上一利

雨後幽蹊通古龕  
如潮綠樹繞茅庵  
老僧時說盧全訓  
七碗清茶苦亦甘

雨後幽蹊古龕に通ず  
潮の如き綠樹茅庵を繞る  
老僧時に説く盧全士の訓  
七碗の清茶苦亦た甘し

令和二年度の全国漢詩大会の予定

奮って応募しよう！

詳細は、グーグル等で各大会を「検索」。  
漢詩応募規定・用紙は、各大会のホームページから入手できます。

●第三十五回国民文化祭・みやざき2020  
全国漢詩の祭典  
十月二十四日(土) 宮崎市  
自由題

●令和二年度  
応募期間 二月一日～四月三十日

●全日本漢詩連盟「扶桑風韻」漢詩大会  
自由題  
応募期間 八月一日～十月三十一日  
応募資格は全漢連正会員及び準会員

●第二十三回全国ふるさと漢詩コンテスト  
(多久市主催)  
詩題と応募期間は三月頃決定予定

●第五回漱石記念漢詩大会  
十二月五日 熊本市  
自由題

●第十二回諸橋轍次博士記念漢詩大会  
応募期間 四月一日～六月三十日  
応募期間等日程未定 三条市

# 神奈川県漢詩連盟 令和二年の行事予定

## カンレンダーに予定を記入しましょう

### ●初心者入門講座

漢詩の鑑賞と実作(全五回の講義と実習、第十四期生)  
漢詩に関心のあるお友達に声をかけ、推薦して下さい

期 日 ①四月十五日(水) ②四月二十八日(火) ③五月十二日(火)

④六月二日(火) ⑤六月十六日(火)

時 間 午後一時三〇分～四時三〇分

講 師 三村公二会長他 連盟役員

場 所 神奈川近代文学館

問合せ・受講申込(連盟事務局)

〒243-0412 海老名市浜田町十六ー九 高津有二

TEL/FAX 046-233-7641 Mail yutakatsu626@nifty.com

### ●総会・講演会・懇親会

期 日 五月二十七日(水)

時 間 午後一時～四時三〇分(総会・講演会) / 五時～六時三〇分(懇親会)

場 所 神奈川近代文学館(総会・講演会) / KKRポートビル横浜(懇親会)

総会議題 令和元年度事業報告、令和二年度活動計画、他

講演会 石川忠久先生 演題未定

参加申込 総会は申込不要。懇親会出席の方は、四月初旬発送予定の開催案内に

同封の振込用紙で振込み願います。

### ●研修会

秋の予定、詳細は次号二十七号にて

### ●吟行会

未定、詳細は次号二十七号にて

### ●秋の漢詩講演会

詳細は次号二十七号にて

## 編集後記

令和の賀状は**好好**といきましたか。さて、令和の行事も一段落したところで次なるは五輪の話題。岡崎前会長の「平成の漢詩あそび」を参考に吟情を動かしてみても如何でしょうか。一時、唐宋を離れてみるのも一興かと。

漢詩には文字通りの解釈の裏にほんとうに言いたい事が隠れているのはご承知の通り。よく知られているのが「雲雨」です。それでは「風月」に隠されているのは何だと思えますか。風も月も囿いをとると虫と二になります。虫は人と同一と考えますので、二人となりなんと愛の隠喩となるなんて。もはやパズルを解くようでなかなか一筋縄ではいきません。

元日

王安石

爆竹聲中一歲除 爆竹の聲中一歲除とぎ

春風送暖入屠蘇 春風暖を送って屠蘇に入る

千門萬戶曠曠日 千門万戸曠々たる日とらう

総把新桃換舊符 総て新桃を把つて旧符に換か

一人、十六才の少女任せにはできない温暖化が憂慮される令和ですが、ここは南洲の家訓ではなく子孫に美しい地球を残したいと思うのは親世代の共通の願いではないでしょうか。五十年後には食料の争奪戦が起り、弱者が生き残れないなどとなってほしくありません。さて、漢詩は絶滅から逃れられているのでありましょうか。(大森列子)